

国際協力 (2-C-10-4~2-C-12-1)

本セッションでは、水環境分野での国際協力に関する6件の発表が行われた。2-C-10-4では、北京で実施された市民らとの水質調査活動についての報告であった。市民自らによる環境調査は日本では当たり前のようになっているが、身近な川の調査方法・問題発見・問題解決方法の能力開発について協力したものである。2-C-11-1から2-C-11-3は、途上国における水供給・利用の実態と衛生学的な問題を報告したものである。2-C-11-1は、スリランカおよびケニアで実施されたODA水供給プロジェクトが住民の水源選択に与えた影響をアンケート調査によって明らかにしたものである。利用水源の転換は地域によって異なっており、その要因として水道料金の意識が挙げられた。ただ、質疑では、水源転換に対する住民の期待がどの程度であったのかも利用満足度へ影響を与えているのではないかと指摘された。2-C-11-2および2-C-11-3はともにメコン流域における報告であり、前者は統計情報に基づく水系感染症リスク評価、後者は水利用状況と衛生学的安全性に関する評価をしたものである。説明変数の1つである人口関連指標に説明しにくい所があったものの、途上国における水利用条件や貧困が感染リスクと密接に関連していることが示された。さらに2-C-11-3では雨季と乾季、都市と農村との違いでどの水源がリスクの高いものか、現地での簡易試験(大腸菌群数)および専門家などへのインタビューで明らかにしている。リスクを低減させるための対策提言の貴重な資料となる。2-C-11-4は、海外の大学と協力し、e-learningによって環境工学教育を実践している事例を紹介したものである。実用までに解決されなければならない点やノウハウの積み重ねが必要なものの、今後の水環境研究者や技術者の人材育成において活かされる機会が多いただろう。2-C-12-1は、洪水によって感染するリスクの高い病原菌(レプトスピラ菌)について、水理学的な方法でリスク評価するための基礎的検討として、Real time PCRによる解析のためのプライマーの作成について報告された。

以上の発表には60名程度の聴講者がいた。今後、途上国の研究者等との共同による水環境改善・保全プロジェクトが進展し、研究成果のみならず技術(教育・指導)協力や実際的な効果について報告されることを期待したい。

(岩手県立大学・総政 山田 一裕)